

## 《書評》

## 染谷智幸、崔官編 『日本近世文学と朝鮮』

勉誠出版、2013年4月、227頁

鄭 英實\*

Book Review: Someya Tomoyuki, Choi Gwan, ed, Early Modern Japanese literature and Korea, Tokyo: Benseishuppan, 2013

JEONG Youngsil

## 目次

- ①「韓国人専門家による日本近世文学研究と、日本人研究者による朝鮮古典文学味読」  
延広真治
- ②「韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向」鄭澐
- ③「壬辰倭乱（文禄の役）と日本近世文学」崔官
- ④「通信使行から学芸の共和国へ」高橋博巳
- ⑤「軍書の中の小早川隆景—碧蹄館の戦いを中心に」井上泰至
- ⑥「近世期における韓日の英雄伝説の比較—民衆の英雄としての金徳齡と由比正雪」李忠澐
- ⑦「近世日本・韓国における遊山の旅—十八世紀以降の漢文紀行を中心に」金廷恩
- ⑧「【コラム】朝鮮通信使の見た富士山と金剛山への想い」龍野沙代
- ⑨「近世日韓における既婚女性の虐待史—お岩と香娘を中心に」高永爛
- ⑩「朝鮮文学の花・妓女(妓生)—日朝遊女比較論の前提として」山田恭子
- ⑪「転生の物語の背景—『桜姫東文章』と「バンジージャンプする」」加藤敦子
- ⑫「日本近世笑話と朝鮮漢文笑話」琴榮辰
- ⑬「朝鮮の淫談稗説『紀伊齋常談』から見えてくるもの」染谷智幸
- ⑭「日本における「乳虎図」の様相」崔京国
- ⑮「朝鮮牛肉丸、江戸時代の万能薬」金時徳
- ⑯「【コラム】日韓のさまざまな峠を越えて—今の時点から、シンポジウム「日本近世文学と朝鮮」の意義を考える」染谷智幸

\*慶尚大学校慶南文化研究院特別研究員

壬辰倭乱によって断絶された日朝交流は、外交が再開された1607年から1811年まで、合計12回の通信使が派遣されるなど、唯一の外交国としての接触を続いていた。使節団の派遣は、物と人の交流はもちろん、目に見えない諸文化の接触も呼び起こす絶好のチャンスであろう。「鎖国」という外交政策を基本政策としていた日朝知識人において、異国人との出会いは選ばれた少数の人間にしか許されない貴重な経験であるが、それはまた様々な形に変え、日本と朝鮮に広がり、影響を与えている。

本書は、2011年9月、韓国の高麗大学校で行われた日本近世文学会のシンポジウム、「日本近世文学と朝鮮」で発表された5編の論考と、シンポジウムのテーマに関わる様々な分野の新たな論考11編をまとめたものである。本書の編者である染谷智幸氏は序章に当たる「日本近世文学と朝鮮—序にかえて」において、従来の研究がもっぱら中国との関係究明に偏っている状況を指摘しながら、今までの現状を「朝鮮の不在」と表現した。しかし、翻訳・戦争の文芸化・紀行文・女性・転生・笑話・絵など、多様な分野から選ばれた16編の論考は、日本近世文学における朝鮮の存在を堂々と証明するものであろう。

まずは本書収録の各論考の内容について簡略に紹介しておきたい。

#### ① 「韓国人専門家による日本近世文学研究と、日本人研究者による朝鮮古典文学味読」 延広真治

本稿は、韓国の専門家による日本近世文学の研究業績（日本語のみ）について、散文・韻文・芸能の三部分に分け、その意義と問題点について紹介している。延広氏の報告は、韓国人研究者による日本近世文学研究の状況を知る非常に有益なものであろう。なお、日本人研究者による朝鮮古典文学の味読が必要である理由を述べながら、他国の研究成果や文献に対する関心は、結局、自文化をより多角度から考察するきっかけになることを示している。

#### ② 「韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向」 鄭滢

鄭滢氏は、韓国における日本近世文学資料の翻訳出版および研究の動向について、1945年以降から2012年までの資料から調査を行なっている。鄭氏の分析によると、古典文学の翻訳および出版においては、2000年代に入ってから急増していることが分かる。これは、韓国における日本古典の読者層の拡大、それに伴う日本研究者の増加とレベルの向上に繋がる。一方、韓国での近世日本研究の動向においては、その研究対象の分野が多様化していることと、両国の思想、文学や民俗文化分野での活発な比較研究がなされていることが指摘された。

#### ③ 「壬辰倭乱（文禄の役）と日本近世文学」 崔官

周知の通り、壬辰倭乱は東アジア世界を根本から揺るがした一大事件であった。崔氏は、壬辰倭乱による様々な変化の中でも、特に、日本近世文学の展開様相から見られる二つの系統に注目している。まず一つ目は、学識のある下級武士や従軍僧侶による初期短編記録類から『太閤記』、『朝鮮征伐記』を経て、和刻本『懲愆録』の影響による「朝鮮軍記物」が完成するまでの過程で

ある。初期、個人の体験を記録するため極めて制限的であった傾向は、あくまでも日本中心主義ではあるものの、徐々に総合的かつ客観的な事実への記述へ移っていくことが特徴である。もう一つの系統は、18世紀以降登場する戦乱を脚色した人形浄瑠璃や歌舞伎の作品群である。人形浄瑠璃や歌舞伎に体表される近世庶民劇の中に、壬辰倭乱と関わる特別な事件や戦争の英雄が虚構化され、特定のイメージのみが強調されていることが見られる。

#### ④ 「通信使行から学芸の共和国へ」高橋博巳

本論考は、1764年に派遣された癸未・宝暦通信使と日本文人、特に木村兼葎堂グループとの交流と、その後中国へ派遣された燕行使の中国文人との交流を取り上げ、浪華(大阪)－ソウル－北京をつなぐ文人の文芸交流ルートが存在を証明している。高橋氏は、そこから一歩進み、東アジアにおける「学芸の共和国」の形成と存在について論じている。朝鮮通信使の派遣を日朝のみの接触に限った観点から抜け出し、朝鮮を通じて日本・朝鮮・中国、三国の交流の延長線上で考察している点は、研究領域の拡大という面で評価すべきところであろう。

#### ⑤ 「軍書の中の小早川隆景—碧蹄館の戦いを中心に」井上泰至

井上氏は、崔官氏と同じく壬辰倭乱の文芸化について考察を行なっているが、崔氏が全般的な特徴を類型化したことに比べ、諸武将、すなわち個人の文芸化に注目している。特に小早川隆景を事例として取り上げ、諸文献が描いた隆景の特徴を比較することにより、戦略家・戦争の批判者など、同一人物に対する様々な解説が存在することを指摘した。井上氏は、このような文芸化の背景に対して、軍学者の環境が反映されている可能性について指摘する。

#### ⑥ 「近世期における韓日の英雄伝説の比較—民衆の英雄としての金徳齡と由比正雪」李忠濬

李氏の報告は、韓日の英雄小説を比較し、同じ文化圏に位置することによる交通の要素を究明するとともに、両国の固有の文化的背景によって変容していた英雄像のあり方を比較するものである。比較対象として取り上げられた金徳齡と由比正雪は、社会に対する民衆の意識を対弁する英雄であるため、伝承する過程で見られる変容の様子を追跡する作業により、民衆の感情とその表出に関わる日朝両国の意識の差が見られる。

#### ⑦ 「近世日本・韓国における遊山の旅—十八世紀以降の漢文紀行を中心に」金廷恩

18世紀以降、庶民にまで遊山が広く浸透している日本とは違って、朝鮮は、旅を楽しめる階層に限られている実情であったため、ほとんどの紀行文は漢文で書かれた。金氏は、日本の比叡山と朝鮮の伽倻山紀行文をとり上げ、日朝両国の旅文化を比較する。金氏も述べているように、漢文紀行文に対する研究は日本でも韓国でもほとんど進んでいない実状であるため、無限な可能性を持つ分野でもある。但し、旅というのは個人の性向や好みが見れやすいため、特徴として一般化する前には、十分な検討が必要であることを指摘しておきたい。

## ⑧ 「【コラム】朝鮮通信使の見た富士山と金剛山への想い」龍野沙代

富士山と金剛山をめぐる朝鮮通信使と日本文人の論争は、何回もかけて使行録全般に見られる。龍野氏は、富士山と金剛山に対する両国の記録から、それぞれの微妙な立場の差をとり上げ、その論争の背景を記している。日本の文士にとって富士山は日常的な存在であることに対し、朝鮮文人にとって金剛山は非日常的であり、数多い異民族の侵略から国を守ってくれた護国の象徴でもある。これは、両国の間に山に対する明確な立場の差が存在することを意味する。結局、富士山と金剛山をめぐる論争は、相手の立場を理解しない限り永遠に繰り返すしかない問題であろう。

## ⑨ 「近世日韓における既婚女性の虐待史—お岩と香娘を中心に」高永爛

高氏は、日本の鶴屋南北の『東海道四谷怪談』と朝鮮の『三韓拾遺』所収「春娘伝」を取り上げ、文学に描かれた近世日韓の女性の人生を述べている。高氏の分析によると、それぞれの主人公、お岩と春娘は「貧しさ」のために虐待され、「愛のない夫」により直接虐待され死んだ。しかし、その恨みを解消する方法は異なって、香娘の場合は個人感情に重点を与え、公的「義」の先行による「愛」の獲得へ、お岩の場合では既婚女性が抱えている苦痛、痛手の問題を取り上げ、私的復讐から公的復讐へと発展する。

## ⑩ 「朝鮮文学の花・妓女（妓生）—日朝遊女比較論の前提として」山田恭子

山田氏の研究は、本格的な日朝遊女比較に入る前、朝鮮側の妓女について、その実態を整理したものである。妓女（妓生）と遊女は、日朝文学に様々な形で登場するという共通点を持つものの、身分や居住地など、その特質においては大きな相違が存在する。

## ⑪ 「転生の物語の背景—『桜姫東文章』と「バンジージャンプする」」加藤敦子

日本の歌舞伎『桜姫東文章』と韓国の映画「バンジージャンプする」（2000年作）は、生まれ変わって同性同士として巡り合った人々の愛を描いている。加藤氏は、両作を貫通するテーマの類似性を分析する一方、「転生」に対する日本と韓国の視覚差を明らかにした。『桜姫東文章』は転生の奇談を因果の証としてとらえていることに対して、「バンジージャンプする」は愛の真実の証でとらえている。このような結果に対して、加藤氏は両国の人間観の差からその理由を探している。

## ⑫ 「日本近世笑話と朝鮮漢文笑話」琴榮辰

本稿は、朝鮮時代に成立した漢文笑話集から新たに確認できた日韓共通の笑話を提示し、日本近世笑話研究において朝鮮漢文笑話を研究の視野に入れる必要性について論じている。これは、東アジアにおける笑話の伝播と共有の一端を追究することでもあり、琴氏が目指すユーラシア比較文学研究にも繋がっている意義ある作業だろう。

## ⑬ 「朝鮮の淫談稗説『紀伊齋常談』から見えてくるもの」 染谷智幸

『紀伊齋常談』は、2008年日本で発見された朝鮮の淫談稗説である。発見者でもある染谷氏は、『紀伊齋常談』の特徴として、屈託のない伸びやかな「性」の世界を描き出していること、多層・多様な性をめぐる人間社会の姿を映り出していること、風刺の方法を駆使している点を指摘している。今まで朝鮮は儒教の強い影響下にあった国と認識されてきたが、染谷氏は『紀伊齋常談』を通じてそのような概念から抜け出す必要性を強調している。

## ⑭ 「日本における「乳虎図」の様相」 崔京国

日・中・韓に分布する「乳虎図」の分析や比較を通じて、各国の虎図の特徴とその伝播、そして変貌の様子について論じている。これは、単なる絵に限る現状ではなく、東アジアにおける新文化の伝播過程が窺える課題であろう。文学作品以外に図像というイメージを扱っているのは非常に新鮮に感じられる。

## ⑮ 「朝鮮牛肉丸、江戸時代の万能薬」 金時徳

牛肉の食用が禁止されていた江戸時代、牛肉は「牛肉丸」と呼ばれ、薬として服用された。金氏は、この牛肉丸の調剤、流通に朝鮮が深く関わっていることを指摘しながら、その裏に隠れている江戸民衆の朝鮮像についてその一面を紹介している。食文化における日韓の接触という側面では、特に従来の漢薬材研究と一脈相通じるところがあると思うが、宣伝文句などを利用し、その対象を受け入れる日本人の意識変化に着目したのは評価すべきところであろう。

## ⑯ 「【コラム】日韓のさまざまな峠を越えて—今の時点から、シンポジウム「日本近世文学と朝鮮」の意義を考える」 染谷智幸

日韓の学術交流における不均衡の問題を指摘することから、それを解決する方法として韓国に対する日本のより活発な学術的接近が必要であることを強調している。さらに世界へ広がりだしている日本研究者との連携から、国際日本学の模索を提案する。

以上、16編の論考についてその内容を簡単にまとめた。16編の論考は、「日本近世文学と朝鮮」というタイトル下で、多様な分野から朝鮮と日本の関係を追究し、東アジアにおける日本近世文学をより立体的に考察するきっかけになった。これは、高く評価すべき本書全体の意義であろう。以下では、本書をまとめるいくつかのキーワードとともに研究方法について少し述べたい。

まずは、比較研究について考えてみよう。比較研究というのは、二つ以上の対象を比較しその類似点と相違点を明らかにすることである。本書は、タイトルからも推測できるように、日本と朝鮮という両者の関わりを究明するため、主に比較という研究方法が使われている。比較研究は、既に固着した概念や斬新さを失われた研究対象であっても、比較という視線を付け加えることにより、再度議論の対象として取り上げられる。さらに、評価の定着している作品を他国文学

との比較を通じて、その作品の新たな特徴がより明確に見えてくるという長所があり、人文学のグローバル化とともによく使われるようになった。

ただし、この比較研究が成り立つためには、個別テーマに対する深い研究の先行、そして先行研究の整理、この2点の先決が必要であると思う。時々、まだ十分な議論もされてない研究対象を他国のものと比較し、単なる外在的特徴だけを整理した研究を目にすることがある。たとえ、他国と区別できる独自性が規定できるとしても、逆に国内研究史における位置付けの弱さにより評価を得られなくなる場合もある。なお、先行研究整理も、言語の障壁やシステムの相違など比較研究をする研究者においてはもっともややこしい作業であろうが、過ちを犯さないために必要不可欠の課題である。結局、相違を指摘する単純な比較を超え、その裏に隠れている影響関係に至るためには、個に対する途切れない追究、そして他国の研究成果を積極的に受け入れる姿勢が要求される。

二つ目は、文化の形成と伝播、そして共有である。伝播、共有という表現は、本書でもしばしば登場しているが、どこまでが形成に当たり、どこまでが伝播や共有に当たるかは簡単に規定できない問題である。特に、中国からの影響を強く受けた朝鮮と日本においては、自国文化の独自性と普遍性をいかに見るべきであるのかにも繋がる。従来と比較研究が単純な相違の整理に偏っているのも、一定程度この問題が働いている結果ではないかと思われる。最近、一国文化主義的発想から脱却し、東アジア文化を絶えざる他者との接触による複合体としてとらえる視線が注目されはじめている。文化の普遍性や変化、そして持続性に対する考察こそ一国文化主義から脱却する努力が必要であると考えられる。

本書は、近世日本文学に見られる朝鮮との関わりについて、文学をはじめ様々な分野の研究を収録し、日朝交流を多角度から見るきっかけになった。しかし、ここで一つ日朝関係を見る第3の視線を設定することを提案したい。第三者による日朝関係の考察は、より客観的な視線の確保、そして当事者では見えない意外性の導出が期待できるだろう。